「桂川」（吊歌）を評して情死に及ぶ

北村透谷

青空文庫

まづ祝すべきは市谷の詩人が俗嘲を顧みずして、この新らしき題目を歌ひたることなり。

残花道人嘗つて桂川を渡る、期は夜なり、風は少しく雨を交ゆ、「昨日も今日も五月雨に、ふりくらしたる頃なれど」とあるを見れば梅雨の頃かとぞ思ふ。「霧たちこめし水の面に、二ツの光りてらすなり、友におくれし螢火か、はた亡き魂かあはれ〳〵」と一面惨絶の光景を画きて、先づ幽魂の迷執をうつす。それより情死の事由を列ね、更に一転してその苦痛と応報とを陳ぶ。「あやなき闇に凄然じや、閻羅と見ゆる夏木立」。之より一回転して虚実の中に出没し、視るところのものゝ心裡を写出する一節絶筆なり。

「こゝは処も桂川」、最前の起句を再用して、「造化の筆はいまもなほ、悲惨の景色うつしいで、我はた冥府の人なりき」といふ末句の如き、千鈞の重ありと云ふべし。これより急調に眼を過ぐるものを言ひ、「三ツ四ツおちし村雨は、つゝみかねたる誰が涙かな」にて結び、更に「玉鉾の道は小暗し、たどりゆく縄手はほそし、松風の筧の音も、身にしみていとうらかなし、」と巧麗婉艶の筆を以て、行路の詩人の沈痛なる同情を醒起す。これより漸く佳境に進みて「影なる人のかたる」を言ひ、或は平瀉、或は急奔、遂に「われらが罪をゆるせかし、犠牲となりしは愛のため」にて全篇を結べり。余は残花氏の巧妙と幽思、この篇にて尽くるを見る、明治の韻文壇、斯かる佳品を出すもの果して幾個かあらむ。

試に余をして簡約に情死に就きて余が見るところを言はしめよ。

人の世に生るや、一の約束を抱きて来れり。人に愛せらるゝ事と、人を愛する事之なり。造化は生物を理するに一の法を設けたり、禽獣鱗介に至るまで、自からこの法に洩るゝ事なし。之ありて万物活情あり、之ありて世界変化あり、他ならず、心性上に於ける引力之なり。人はこの引力の持主にして、彼の約束の捺印者なり。

余今ま村舎に宿して一面の好画を見たり。雄鶏は外に出でゝ食をもとめ、雌鶏は巣に留りて雛を温む。孵りて後僅かに半月、或は母鶏の背に升り、或は羽をくゞりて自から隠る、この間言ふ可からざるの妙趣ありて余を驚破せり。細かに万物を見れば、情なきものあらず。造化の摂理愕ろくべきものあり。

或は劣情と呼び、或は聖情と称ふ、何を以て劣と聖との別をなす、何が故に一は劣にして、一は聖なる、若し人間の細小なる眼界を離れて、造化の広濶なる妙機を窺えば、孰を聖と呼び、孰れを劣と称ぶを容るさむ。濫りに道法を劃出して、この境を出づれば劣なり、この界を入れば聖なりと言ふは何事ぞ。

情の素たるや一なり、之を運ぶ器と機の異なるに因つて聖劣を分たんとす。世間の道義は之に対して声を励まして正邪を論ず、何ぞ迂なるの甚しき。文化は人に被らすに数葉の皮を以てす、之を着ざれば即ち曰く、破徳なりと。むしろ蕃野の真朴にして、情を包むに色を以てせざるに如かんや。

人の中に二種の相背反せる性あり、一は研磨したるもの、一は蕃野なるもの、「徳」と云ひ、

「善」と云ひ、「潔」と云ひ、「聖」といふ、是等のものは研磨の後に来る、而して別に「情」の如き、「慾」の如き、是等のものは常に裸躰ならんことを慕ひて、縦に繋禁を脱せんことを願ふ。この二性は人間の心の野にありて、常に相戦ふなり。

電火は人を戮ろすと謂ふ。然り、渠は魔物なり。然れども少しく造化の理を探れ、自からに電火の起らざるべからざるものあるを悟れ、天の気と地の気と、相会せざる可からざるものあるを察せよ。自然界に於て猶此事あり、人間の心界何ぞ常に静謐なるものならんや。風雨驀かに到り、迅雷忽ち轟ろく光景は心界の奇幻、之を見て直ちに繩墨の則を当て、是非の判別を下さんとするは、豈達士の為すところならんや。

人は常に或度に於て何物かの犠牲たり。能く何物にも犠牲たらざるものは、人間として何の佳趣をも備へざる者なり。何を以て犠牲たる、何が故に犠牲たるを甘んずるを得るや、美いかな人間の情、好むべきかな人間の心、友の為に身を苦しめ、親の為めに心を痛め、而して自ら甘心し、真実何の悔恨なきを得るは、豈に讃むべき事にあらずや。「自己」といふ柱に憑りかゝりて、われ安し、われ楽しと喜悦するものゝ心は、常に枯木なり、花は茲に咲かず、実は茲に熟せず。情は一種の電気なり、之あるが故に人は能く活動す。時に或は愁雲恨雨の中に暴然鳴吼をなし、霹靂一声人眼を愕ろかすことあるも、亦た止むべからず。花なき花は之なり、実なき実は是なり。情死軽んずべからず。

「世の中に絶えて心中なかりせば、二世のちぎりもなからまじ」（旅中、本書を携へず、或は

誤字あらん）、と「冥土の飛脚」に言はせたる巣林子、われその濃情を愛す。人の誠意は情によりて始めて見るべし。沈静は元より沈静の味あり、然れども熱意も亦た、熱意の味あるにあらずや。熱意は人を誠実に駆り、誠実は往々にして人を破却に逐ふ、破却素より悪むべし、然れども破却の中に誠実あり、人死して誠実残る、愛の妙相は之なり、「真玉白玉、種類あれど、愛に易ふべき物はなし」、と市谷の詩人大に若くなれり。

よしや幻想に欺かるゝ事ありとも、二人が間には一点の詐偽なく、一粒の疑念なし、二にして一、一にして二、斯の如く相抱て水に投ず。死する時楽境にあるが如く、濁水も亦た甘露を味ふに似たり、万事斯くして了れば、残るものははしたなき世の浮名のみ。浮名も何ぞや。嗚呼罪なり、然り、罪なり、然れども凡そ世間の罪にして斯の如く純聖なる罪ありや。死は罰なり、然り、罰なり、然れども世間の罰にして斯の如く甘美なる罰ありや。嗚呼狂なり、然り、狂なり、然れども世間の狂にして斯の如く真面目なる狂ありや。幻と呼び夢と呼ぶも理あれど、斯の如く真実なる幻と夢とは、人間の容易に味ひ得ざるところ。之を以てわれは情死を憫れむ事切なり。

義理人情に感ずること多きもの、情死の主人となること多きは、巣林子の戯曲之を証せり。捉ふるものは義理人情、逃ぐるに怯ならず、避くるに卑しからず、死を以て之を償ふ、滅を以て之を補ふ、情死は勇気ある卑怯者の処為なり、是を大胆なる無情漢に比すれば如何ぞや。

「そも愛といひ恋といふ、ふかき意を世の人は、さら〳〵くまず氷より、霜より冷えしそのこゝ

ろ」、と残花氏の妙句味ひ多しと言ふべし。請ふ、去つて再び「桂川」の一篇を読め、巣林子以後図らずも「情死」は友人を法界の人に得たりけり。

（明治二十六年七月）

青空文庫情報

底本：「現代日本文學大系　6　北村透谷・山路愛山集」筑摩書房
1969（昭和44）年6月5日初版第1刷発行
1985（昭和60）年11月10日初版第15刷発行
初出：「文學界　七號」文學界雑誌社
1893（明治26）年7月30日
入力：kamille
校正：鈴木厚司
2007年11月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

「桂川」（吊歌）を評して情死に及ぶ

北村透谷

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/